

エリ阿斯・カネッティについての覚書：「救われた舌」-ある青春の物語-をめぐって

著者	中野 隆正
雑誌名	基礎科学論集：教養課程紀要
巻	1
ページ	25_a-38_a
発行年	1983
URL	http://doi.org/10.18924/00000047



エリアス・カネッティについての覚書

「救われた舌」—— ある青春の物語——をめぐって

中 野 隆 正

昭和51年の冬のある日、夜間は零下20度近くまで気温が下がる日々が続いていたが、早朝の寒さの中を三三五五と、学生達はミュンヘン大学の Große Aula（大講堂）へと急いでいた。毎週火曜日の1時間目はフリーヴァルト教授の「戦後のドイツ文学について」の講義がある。すらりとした、しかしドイツ人としてはそう大きな体ではなく中背の教授は、明瞭な非常に聞きやすいドイツ語を話し、その講義は学生に圧倒的な人気があった。そのため、座席に座りきれない学生達は通路に腰を下ろしており、それでもあぶれた学生達が後ろにたくさん立っていた。

やがてその日の講義も終わりに近づいた時、教授は、「今晚エリアス・カネッティという作家の講演があるので、時間の都合のつく人は聞くように」と言われた。

自分にとっては全然なじみのない作家であったが、ミュンヘンの書店には当時、たくさんカネッティの作品が並べられており、ドイツでは人気があることがうかがわれた。

ためしにのぞいて見ようという軽い気持ちで、私はやがて夕食をしたためた後、昼間と同じ Große Aula（大講堂）で、8時から行われるカネッティの講演に出かけて行った。

その朝講義をうけたフリーヴァルト教授の簡単な紹介のあったのちに、エリアス・カネッティは演台に姿を見せたが、意外に背が低く小柄であり、半白の髪とひげをたくわえた人物であった。当時彼はもう71才で、人生を生き抜いて思索に時間を費やしたのであろうか、顔は深い皺しわにおおわれ、眉間には縦皺じわが刻まれており、その鋭い目の輝きと共に私は強い印象を与えられた。

やがて話し出した彼のドイツ語は、しかし大変 sch（シュ）の発音が耳ざわりで聞きとりにくいものであった。それは、これから述べる「救われた舌」に出てくるように、彼がドイツ人ではなく、スパニオル（スペイン系ユダヤ人）だからだったのであらうと思われる。その晩は、「作家の使命」という演題で、現代における作家の存在と、その存在意義について語ってくれた。

エリ阿斯・カネッティは、1905年7月25日、ブルガリアのルスチュクに生まれた。両親は共にスペイン系ユダヤ人で、父は祖父の店を手伝う富裕な商人であった。日常カネッティは、両親達とスペイン語を使っていたが、8才の時、ウィーンの小学校へ入るためにわずか3ヵ月の間に母からドイツ語をたたきこまれた。以後、ドイツ語で物を書くようになる。19才でウィーン大学へ入った彼は化学を専攻、理学博士となる。しかし、卒業後文筆活動に携わるようになった彼は、最初の小説「眩暈^{めまい}」を1931年に執筆し、続いて「群衆と権力」「猶予された者たち」「断ち切られた未来」等次々と発表し、1981年、ノーベル文学賞を受賞した。

ここに採り上げた「救われた舌」一或る青春の物語一は、1977年、彼の72才の時の作品で、彼が生まれた時から16才になるまでの自らの生いたちを語った自伝である。

「私の最初の記憶は赤色に染まっている。ひとりの少女に抱かれて、私はドアから外へ出る。眼の前の床は赤く、しかも左手にも同じように赤い階段が階下に通じている。同じ階の向かいのドアが開き、顔に笑みを浮かべた男が出てきて、馴れ馴れしく私の方へ歩いて来る。私のすぐ側まで来ると、立ち止まって、『舌を見せろ』と言う。私が舌を出すと、彼はポケットに手を突っこみ、ジャックナイフを取り出して開き、その刃を舌先に突きつける。彼は『すぐ奴の舌を切り落とそう』と言う。私は舌を引っこめる勇気がなく、彼はますます擦り寄って来て、今にもその刃を舌に当てそうになる。きわどい所で彼はナイフを引っこめ、『今日はまだやらない、明日だ。』と言う。彼はナイフを再びパチンと閉じてポケットにしまいこむ。

毎朝、私達はドアから外の赤い廊下へ出て行き、ドアが開いて、例の顔に笑みを浮かべた男が姿を現わす。」

この記憶をカネッティは自分1人の胸にしまっておき、はるか後年になって母にそれを正した。赤一色と聞いて彼女は、父とカネッティと共に1907年の夏を過ごしたカールスバート（チェコの保養地）の下宿屋のことだと悟った。2才のカネッティのために、両親はブルガリア生まれのまだ15才にもならぬ子守り娘を連れて来ていた。彼女は廊下ひとつ隔てたカネッティの真向かいの部屋に住んでいた若い男と知り合い、時々夜になると彼の部屋へ行っていた。カネッティの両親は彼女のことで責任を感じて、彼女を即刻ブルガリアへ送り返した。彼女はカネッティを抱いた朝の散歩の時も、若い男と出会っていたのである。ナイフによる脅迫は効を奏し、当の子供は16年間、それについて沈黙を守っていた。

このような体験から始まる、彼が生まれたブリガリアのルスチュクは、様々な出身の人間が生活し、1日に7～8ヵ国語を耳にすることも稀ではなかった。ルスチュクには、ブルガリア人、トルコ人、ロシア人、ギリシャ人、ジプシー、ルーマニア人、そしてカネッティらのスペイン人がいた。そこからカネッティの成長は言語との共存、かつ言語との闘いとなることは避けられない。自分の舌をいかにしてこの多言語のるつぽから救い出すか、これがカネッティの問題だったことを、この作品は、一面微に入り細をうがって語っていく。従ってこの作品は、言語的自伝として読むことも可能である。又、彼が後に体験したことはすべてルスチュクで一度は起こったことであったと述べている。それはカネッティが後に携わることになった社会上の諸問題についての、最初の体験なのである。つまり死と殺人、権力、群衆の形成、変身である。

この体験が伝えられる媒介物のための戦い、つまり言葉と文字のための戦いも、このルスチュクと結びついている。

カネッティは、4つ年上の従姉のローリカと、離れることのできない遊び友達であった。彼は贈り物を貰うと、すぐにそれを持って、「これをローリカに見せなくては」と言いながら逃げ出すのであった。その後ローリカは学校へ行

くようになり、彼はひとりぼっちで遊びながら彼女を待ち受け、彼女が帰宅すると、すぐ門の所で掴まえて、学校で何をして来たか聞き正した。暫くして、彼女は習字帳を持って戻ってきたが、読み書きを学んでいたのである。そこにはかつて見たあらゆるものにも増して、カネッティを魅了した文字がいくつも青インキで書かれていた。しかし、彼がそれに触れようとすると、突然彼女の表情は厳しくなり、「そんなことをしてはいけない、そうしていいのは自分だけだ。」と言った。それ以来、彼女はいつも彼を帳面に寄せつけなかった。毎日毎日彼女は彼に帳面をねだらせ、毎日毎日彼女はそれを拒んだ。

ある日、巧みな計略によって彼は、もはや逃れる術もないような、さほど高くはない塀の陰に、彼女を追いかむことに成功した。今や彼は彼女を取り抑えて、ひどく興奮しながら、「それを僕にくれ、それを僕にくれ、」と叫んだが、「それ」は帳面のことであれば文字のこともあった。彼女は帳面を両手に持って頭上高く上げ、彼よりもずっと背が高かったのでそれを塀にのせた。彼は喘ぎながら、さかんに跳躍してみたが届かず、彼女は傍で嘲笑していた。

突然彼は、家を迂回し炊事場の中庭へ行った。そこには薪割りのための斧があり、それで彼女を殺すつもりだったのである。

彼が戻って来た時、斧を両手で高く捧げ持ち、「じきに僕はローリカを殺してやるぞ、じきに僕はローリカを殺してやるぞ」と叫んでいるのを見て、彼女は金切り声を上げて逃げ出した。彼女は、まるでもう彼に斧で殴りかかれ、それが命中してしまったみたいに大きな金切り声をあげた。

その声に祖父が飛び出して来て、カネッティの手から斧を挽ぎとり、腹を立てて怒鳴りつけた。父は旅に出ていて不在だったが、母がいたのでみんなが集まって親族会議が開かれ、彼は重いお仕置きをされたのである。カネッティは、このような言葉に対する強い関心、激しいあこがれの念といったものを、これ以後、終始変わらず持ち続けていくようになる。

1911年、子供を全員手もとにおいておきたい家長の祖父との半年にわたる激

しい争いの後に、カネッティの両親は、イギリスのマンチェスターに引越しをする。旅立ちの2、3日前に万策尽きたことを知った祖父は、庭園風の中庭でカネッティの父を、己れの息子を厳かに呪った。——ぞっとしながら傾聴している並いる親戚の者達の前で。

この父方の祖父は、ルスチュクの高台にある街から、まっすぐ港に通じている急勾配の通りに店を持っていた。その店は堂々として高く見える3階建ての建物の中にあっただが、店では植民地の商品が卸で売られており、店内は広々としていて、素晴らしい匂いがした。床にはさまざまな種類の穀物を詰めた大きな袋が、綴じ目を開けたまま置かれ、黍や大麦の袋や米の袋があった。紅茶やコーヒー、そして特にチョコレートがあり、マッチや石鹼やろうそく、ナイフ等もあった。祖父は奥の帳場に坐って厳しく管理し、彼が何か指示を与えると、それを受けた従業員が急いで走り去ったし、又時には包みを持った従業員が店を出て行くこともあった。祖父は又、自分の息子達を全員店で働かせ、息子達の意志に関係なく仕事につかせ、高圧的に目をひかせていた。

しかし、祖父の悪魔のように活発な面を、カネッティは後年ウィーンに祖父を訪れてきた時に知る。ホテル・オーストリアに滞在している祖父を訪ねて、泊ってきたカネッティは次のように語る。

「祖父の好奇心は常に旺盛であり、私は一度も、ただの一度も、彼が疲れているのを見たことがなかったし、彼と二人きりでいる時でさえ、彼が私を絶えず一瞬たりとも揺るがせにせず、観察しているのを感じた。ホテル・オーストリアの彼のもとで過ごした、あの幾夜かに、私が寝入る前に最後に考えたのは、彼が本当は眠っていないということであり、これ又信じ難いように聞こえるかもしれないが、私はいついかなる時にも彼が眠っているのを見たことがない。朝彼は、私よりずっと前に目を覚まし、顔を洗い服を着ていたし、大抵かなり長くかかる朝の祈りを済ませていた。しかし、夜私が何らかの理由で目を覚ますと、彼はまるで私がじき目を覚ますのを先刻承知していたかのように、自分のベッドに体を起こして坐っていて、その折自分にしてもらいたいことを、私から告げられるのを待つばかりになっていた。しかし彼は、不眠症を訴

えるような人達の一人という訳ではなかった。逆に彼は潑刺としていて、いつでもどんな事でもやる気があるように見えたし、常に目覚めている気構えという点で悪魔のような人であり、多くの人にとっては、このあり余る程の活力のせいで——彼等が彼に払う敬意にもかかわらず——いささか無気味な存在であった。

このような厳しい祖父の監視から、やっと逃れることのできたカネッティの両親は、しかし、カネッティが7才の時イギリスのマンチェスターにおいて心臓麻痺のため父が急死することで、運命の転換期を迎える。このことは死と命令を与える権力への恐れと、決して消えることのない憎しみの念を、子供であるカネッティの心に残した。この命令を与える権力を、死の命令として、精神的打撃を受けて、彼は体験したのである。祖父にとっても、呪いをかけた息子の急死から終生立ち直れなくなる。

父との思い出の中で、カネッティが一番楽しかったのは、日曜の午前両親の寝室へ行くことを許された時であった。二人ともまだベッドに横になっており、カネッティは父のベッドへ跳び上がり、二人の弟達は母のもとへ行った。父はカネッティと一緒に体操をし、学校のことを根ほり葉ほり質問し、物語りを語ってくれた。カネッティはそれを楽しみにしていたので、いつもそれが決して終わらぬようにと祈った。父はベッドに横になっている時には、格別陽気だったし、顔をしかめて滑稽な歌を歌った。彼は動物の物真似をして見せ、カネッティはそれを言いあてねばならず、正しく言いあてるとご褒美にまた動物園へ連れて行ってやると約束してくれるのであった。カネッティは又、父が他人に対して偏見を持たず、他人の可能性を尊重する態度が好きであった。

時たま日曜日に父は、カネッティをひとりだけ散歩に連れて行ってくれたが、「マージ河畔の草原を私達が最後に散歩した折、彼は常とは全く異なる面持ちで私に話しかけた。彼はしみじみとした口調で、お前は何になりたいかと尋ねたので、私は思わず『ドクターに。』』と言ってしまった。『お前は自分になりたいと思うものになるのだよ』と彼は優しく言ったが、その情愛のあまり

の濃やかさに、私達は二人ともその場に立ちつくした。『私や叔父さん達みたいに商人になる必要はない。大学に行くがいい。そしてお前の一番望むものになるのだ』。」

カネッティはこの対話を父の最後の願いとみなしてきた。後に、家族の者が彼に出す要求に対する防御として、父のこの言葉を引き合いに出している。

カネッティの父は元来芝居を好み、音楽の才能があり、何よりもバイオリンを愛していた。仮借のない家長として、自分の子供達を支配していた祖父は、どの息子をも早くから店に入れたし、ブルガリアのかなり大きな都市には、必ず息子達の誰かが取りしきる支店を出すことを望んでいた。しかし、父があまりにバイオリンを弾いて過ごす時間が長いので、祖父はバイオリンを取り上げた上、父の意志に反してすぐ店に出した。父は店がどうしても好きになれず、店の利益など全く眼中になかった。しかし、彼は祖父よりもはるかに気が弱く、祖父に屈服した。母の助力を得てブルガリアから逃げ出し、マンチェスターにきた時彼はすでに29才になっており、家族の面倒を見なければならなかったもので、もう商人をやめることはできなかった。こういう訳で父は、自分の息子達には違った態度で臨もうと決心していたのである。

父との感情的、知的同一化は、その突然の死により——カネッティの重要な体験であるが——むしろ強められ、変化して彼のかなり後期の作品に表われてくる。

しかし、父の死により一番ショックを受けたのは母であった。父が死んだ時カネッティは、隣家の息子と隣家の庭の木にちょど登ろうとしていた。その時、家の食堂の窓がひとつ開き、母が上体をぐっと外へ乗り出し、カネッティが隣家の息子と一緒に木の側に立っているのを見て、耳を劈く^{つんざ}叫び声を上げた。「私の息子は、お前は遊んでいる、お前の父が死んだというのに、／お前は遊んでいる、お前は遊んでいる、お前は父が死んだというのに、／お前の父は死んだ、／お前の父は死んだ、／お前は遊んでいる、お前の父は死んだ、／」

彼女は通りへ向かってそう叫んだ。彼女はますます大きな声でそう叫んだ。みんなが彼女を力づくで部屋の中へ引きずりこんだ。それでも彼女は長いこと

叫んでいた。彼女の叫び声と共に、父の死はカネッティの内部へ入り込んでしまい、二度と彼から離れることはなかった。

父の死後、最初の週にカネッティは自殺をしようとした母を守り、本当に力づくで自殺から母を引き戻したのである。父が死ぬまで母はカネッティの人生の中で大きな役割は演じていなかった。しかし今や重要になる。父の死後、少年の物語は反エディプスコンプレックス的關係として読むことができよう。しかし、それは許しがたい縮少を意味することになる。なぜなら、反エディプスコンプレックスの全く反対の力学の中では、争いを引き出すことにカネッティにはなるからである。

母と息子は、情熱的な知性、強い自負、お互いを独占しようとする意欲の点で、非常に似かよっていた。2人は死んだ父を満足させるために戦う。父の持つ重要な機能、つまり保護、会話の相手である事を、お互いに分け合いながら。「しかし今は、私達はそれぞれ相手にとって父の跡形見であったし、私達はそれと知ることなく、二人とも彼のように振舞ったが、私達が互いに元気づけあった際の優しさこそ、彼の優しさにほかならなかったのである。」

やがてウィーンの小学校へ、カネッティを入学させようとした母は、そのためにきわめて短時日のうちにカネッティにドイツ語を教えこもうと決心する。

わずか3ヵ月という短い間に、母から教えこまれたドイツ語は、どんな子供の手にも余るような仕事を、きわめて短時間に為し遂げることを強要したことになった。従って彼女がそれに成功したという事実が、彼のドイツ語のより深い性質を規定したし、このドイツ語は遅蒔きながら、真の苦痛のもとに移植された彼の母国語となった。

カネッティが、彼の作品の中ではほとんど *Ironie* (反語法) を使用していないのは、母国語 (ドイツ語) に対するこのような関係によるのである。ドイツ語は多数の声 (人間) を受け入れるだけの広がりを持つ言葉であるが、この多数の声——自分の声もこの多数の声の中からあらわれる——を、反語的隔たりなしに、真面目に解釈する言葉であるとカネッティは考えている。

言葉の熟達の一つの成果であると共に、同一化をも意味する。カネッティに

はその熟達は、母から父の代理人として受け入れられることを意味した。彼の両親は二人でいる時、お互いにドイツ語で話し合っていたので、夫を失うという、母の人生における恐しい断絶は、彼女から見れば、夫とのドイツ語による愛の語らいが途絶えた事実のうちに、苛酷に現れていたのであった。そこで彼女は、カネッティをできるだけ速く、その後釜に座らせようとしたのである。

今やドイツ語は、母とカネッティを結びつける要素になり、この言葉の存在により二人は起こりうる病的な孤立を免れることができたのである。

自分で物を考え始めるようになると、カネッティは全く無条件に母に敬服するようになる。母の考え、語り、もしくは行うことは全て、最も自然な事実のように、彼の内部に入りこんだ。彼女は多くのことを難じたが、しかし、必ず相対する自分の考えを詳述し、熱烈に、しかも納得のいくよう根拠づけるのであった。

カネッティは、広さとは何かということを当時まだ知らなかったが、しかしそれを感じてはいた。つまり人が実に多くの相反するものを包含しうること、一切の外見上両立せぬものが、同時にそれなりの妥当性を有すること、人が恐怖のあまり寿命の縮む思いをすることなくそれに触れうること、人がその名を上げ、かつそれについて熟慮しなければならないこと、換言すれば人間の本性の真の栄光、それこそ彼が母から学んだ本来のものであった。

カネッティが母から受けた第二の恩恵は、次のようなものであった。「彼女は私に打算というものを免れさせてくれたのである。実用上の理由から、何かを行うという話が私の耳に入ったことは一度もなかった。『役に立つ』ようになるかもしれぬことは、何ひとつ行われなかった。私が把握したいと思ったことはいずれも平等の権利を有していた。私は、この道かあの道の方が快適に効果的に有利に通れるなどと聞かされる羽目に陥ることなく、同時に百もの道を取って進んだ。肝要なのは、事物それ自体であって、その効用ではなかった。人は厳密かつ徹底的でなければならず、嘘八百のない意見を主張できなければならなかったが、しかし、当の徹底性が目指すのは、事物そのものであり、それがもたらすかもしれぬ何らかの効用ではなかった。私がいつか行うであろう

ことは、ほとんど話題にならなかった。職業に関することは、あまりにも等閑に付されたので、あらゆる職業が留保されていた。成功とは人が自分ひとりのために進歩することの謂ではなく、成功はあらゆる人のためになるのであり、さもなければそれは決して成功とは言えないのであった。自分の氏素性、つまり実家の商人としての名望をはっきり自覚し、それへの誇りに満ち、それを決して否まぬ女性が、どうしてこのような視野の自由、広さ、無私に到達したのか、私には不可解である。私はただ、彼女が自分の限界を突然越え出て、考え、感じ、悩んでいるあらゆる者に対して、とりわけ誰にでも与えられている素晴らしい思考過程に対する感嘆の念を覚えつつ、寛大そのものになったことを、戦争による衝撃、戦争で自身にとってこよなく大切な人間を失ったあらゆる者に対する、同情に帰することができるだけである。」

1919年の秋から冬にかけて、カネッティは最初の文学的試み、戯曲「ユニウス・ブルトゥス」を書きあげた。この作品は、ローマ共和国の最初の執政官ユニウス・ブルトゥスについて、リヴィウスの歴史で読んだ強い印象のもとに生まれた。その執政官は国法をはなはだ真面目にとったので、ローマ共和国に対する謀反に加担したかどで、自分の息子達に死刑を宣告し、そしてその判決を実際に執行させたのである。それはカネッティにとっては死刑判決と、それによって死刑が執行される命令についての最初の恐怖であった。命令と死刑判決との関連の問題に、それ以降の何十年もの間、現在までカネッティは携わることになる。

母に捧げられた5幕の悲劇「ユニウス・ブルトゥス」は、2,298行に及ぶ無韻詩句であったが、14才のカネッティによって書かれたこの作品は、惨めな程拙劣な失敗作であった。

しかし、この仕事によってカネッティは初めて自負心と野心を持つようになるが、この野心を育んだのは、もはや母ひとりへの愛ではなく、「ペスタロッチ・学校カレンダー」なのであった。そのカレンダーの中にあった偉人達の絵である。世界旅行家、詩人、作曲家、画家、彫刻家、哲学者、自然科学者がそ

ここに集められていた。よかったのは征服者と将軍がきわめて惨めな役割を演じていたことであった。人類の破壊者ではなく恩人を集めることが、カレンダーの製作者のやり方であった。

この偉人達の名前と名前にまつわる業績と共にカネッティは生きる。彼は彼等を受け入れた。彼等は彼の聖人となる。心は純粋な尊敬の念で満たされ、彼等と自分との隔たりは測りしれないようにみえた。厚かましくも、彼等のうちのいずれかの人物と張り合おうとしたものの、当の領域については何も分からず、例え彼等を模倣しても、到底遂行し得ぬに違いない当の仕事の過程については、ただただ驚嘆するほかなかったし、彼等はほかならぬこの理由によって、彼にとって真の奇蹟なのであった。血統、国、言葉、時代、寿命がそれぞれ異なっているその多彩な業績についての、カネッティの反応は明白である。

「私はかつて、人類の広さ、豊かさ、希望というものを、この 182 人の最上の頭脳の持ち主の集まりほどに、強烈に自分に感じさせてくれたものを知らないだろう。」と、彼は言っている。

1921年の春、当時チューリッヒの州立学校に通っていたカネッティの下宿先に突然母が訪れてくる。そしてカネッティがここを出て行くように言う。

「……お前はまだ一日だって自分で稼いで暮らしたことはないわ。お前はそれに関係することは何でも商売の一語で片付けてしまう。お前はお金を軽蔑している。お前はお金を稼ぐ為の労働を軽蔑している。お前は寄生虫であり、お前の軽蔑する人達はそうじゃないということが分かっているの？」

「あなたはきっと僕が寄生虫ではないことを悟るでしょう。そうであるには、僕はあまりに誇り高い。僕は一個の人間でありたい。」

「人間の矛盾を持った人間、という訳ね、お前はよくまあそれを選び出したもんだわ、……一体お前は、本当に自分が人間だとでも思っているの？ 人間というのは、人生と格闘して来た誰かのことです。お前はこれまでに一度でも危険な目に会ったことがある？ 誰かがお前を脅したことがある？ 誰もお前の鼻を打ち砕いたりはしなかった。お前は自分の好きなことを聞き、それをあ

っさり受け入れるけど、でもお前にはそうする権利などないわ。人間の矛盾を持った人間、ですって。／　お前はまだ人間じゃない。お前は無に等しい。お喋りは人間じゃないわ。」

「……お前はまず第一に、世間で実際に何が起きているか知らなければならない。お前はそれを身を持って経験しなければならない。お前は世の荒波に揉まれて、自分の身は自分で守れるということを証明しなければならない。」

「僕がまだ何も証明して来なかったことは僕の責任じゃない。16才の僕に何が証明できたでしょう。」

「そんなことは大したことじゃない、その通りよ。でもほかの少年たちは、お前と同じ年でもう働かされているわ。まともに行けばお前は今では徒弟として二年間奉公している筈よ。私はお前にそうした苦勞をさせないようにして来た。私にはお前がそのことで感謝しているように見受けられないわ。お前はただ高慢なだけだし、毎月毎月ますます高慢になって来ている……。」

「あなたは、私があらゆることを真面目に取るようにといつも望んでいました。それが高慢なんですか？」

「そうよ、お前は自分と同じように考えない他の者達を見下しているから。お前はその上抜け目がなく、気楽な生活を送りながら万事を自分にとって快適なものにしている。お前にとって本当に気掛かりなのは、読む本がたっぷり残っているかどうかということだけだわ。／」

「以前はそうでした、ショイヒツァー通りにいた時は。僕は今はそんなことなど全然考えていない。僕は今、あらゆることを学びたいんです。」

「あらゆることを学ぶ。／　あらゆることを学ぶ。／　誰にもそんなことはできません。学ぶことを止めて、何かしなければならないのです。だからお前はここを去らなければならない。」

「でも学校も終えないうちに、一体僕に何がやれるんですか？」

「お前は決して何もしないだろう。／　お前は学校を終えるだろうし、そうなれば大学へ行きたくなるだろう。お前はなぜ自分が大学へ行きたいのか知っている？　引き続き学ぶことができさえすればよいからだわ。それではお前が怪

物にはなっても、人間にはなれないわ。学ぶことは自己目的ではありません。人は他の人達の中で自分の真価を発揮するために学ばんです。」

「僕はいつも学ぶつもりです。僕は自分の真価を発揮しようとしまいと、いつも学ぶつもりです。僕は学ぶつもりです。」

「でもどうやって？ でもどうやって？ 誰がお前にそのためのお金をくれるでしょう？」

「それを僕は自分で稼ぐつもりです。」

「じゃお前は学んだことをどうするつもりなの？ お前はそのために窒息するでしょう。死んだ知識ほど恐いものはほかにありません。」

「僕の知識は死んだりもしないでしょう。今だって死んではいません。」

「お前がそれをまだ手に入れていないからだわ。手に入った時、初めてそれは死んだものとなるんです。」

このような議論の後に、母はもはや一步も譲歩しなかった。彼女は第一次大戦に敗れた直後のドイツへ、移住する計画を推し進めた。彼女は、そのもっとも厳しい学校へ、戦争に行ってきた最悪の事態を知っている男達の中へ、カネッティを入れる気でいた。

彼はあらゆる手立てを尽くしてこの移住に抵抗したが、しかし、彼女は一向聞き入れず、彼を連れ去った。比類なく本当に幸福な年月、チューリッヒにおける樂園は終わりを告げた。仮に彼女が彼を否応なく引き離さなかったならば、或いは彼は依然として幸福だったかもしれない。しかし、彼が樂園で知ったのとは別の事態を経験したことは間違いない。最初の人間のように、彼が樂園よりの追放によって、初めて生まれ出たことは間違いないのである。

カネッティの著作は、自分と作品との間に一定の距離を保つと同時に、一体化するという方法が採られており、この隔たりと密着の間で緊張が交替する。この関係は、この「救われた舌」—或る青春の物語—においても同様であり、一般読者にとっては斬新な趣向として、概ね好評であるが、批評家の間では、回想作業のこの一風変わった冷静さ故に、驚きを持って迎えられている。これ

はカネッティ自身の独自の考えによるものであり、彼は今は亡き他者を、できるだけ正確かつ公正に回想することを自分の至上の義務とするために回想に手を加えないようにしたと述べており、又自分はたくさんの人物から成り立っているのであるが、その人物が入り乱れてしまわぬように、自身は単純でありたいのだ、とも言っている。このたくさんの人物から成り立っている自分という自己の複合的構成は、時間に流れ去ったたくさんの変身の結果なのである。例えばこの作品の中で、「私達がただ二人きりでいる時、母の考え、語り、もしくはは行くことは全て、最も自然な事実のように、私の内部に入りこんだ。このような時期に、彼女が私に言ったさまざまな文辞から私という人間は生まれたのである」と言っているように、人間存在の二重性を生きていく中で形成される人間、つまり「カネッティを形作った人達」について、本書では述べているのである。

たしかにある種の非常に重要な経験は、この作品の後半の問題全体にとって関連があるため強調されている。父の早い死による衝撃、家庭内の力関係、高齢の祖父の悪魔のような活力、他者の反映としての自分を構成してみること等といったものがそれである。

その出来事が自分をどこへ連れて行くかを知らずに、子供は周囲から学ぶ。しかし、それは誇らしく克服されうる冒険であり、又その個々のものが重要であることを意識しながら。肉体的、言語的に全ての家族の構成員は成長する子供の中へ入った。母が持っている家系の誇りでさえも、子供はそれに批判的であったが、後年、作家の人間の誇りを培ったのである。

※この論文における引用文は

「救われた舌」—ある青春の物語—

エリアス・カネッティ

岩田行一訳

法政大学出版局による。

(神奈川歯科大学助教授)